

# 1860年代における西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし：

## 開国以前の日本人表象とフォークロア研究の興隆

川内 有子 (立命館大学大学院文学研究科)

E-mail yuko.strome.inner@gmail.com

### 要旨

18世紀初頭に起きた赤穂浪人の討ち入り事件およびそれに基づく物語群(「忠臣蔵」)は、イザーク・ティチングの *Illustrations of Japan* (1820) で初めて西洋人によって言及された。しかし、ヨーロッパの人々が、歴史的事実ではなく、人々に膾炙していたこの物語群に基づいて日本人の国民性を解明し始めたのは、その40年後のことであった。

本稿では、1860年代に「忠臣蔵」に言及した西洋人の著作の中から、影響力の大きかったオールコックの回想録 *The Capital of the Tycoon* (1863) の記述を取り上げ、彼らが「忠臣蔵」を民俗誌的資料として用いるようになった経緯について解き明かすとともに、オールコックや同時代のヨーロッパ人による「忠臣蔵」への言及を19世紀のヨーロッパにおけるフォークロア研究の隆盛という文化的背景の中に位置づける。

### abstract

The Ako Incident and the stories related to it, or 'Chushingura', was mentioned in Isaac Titsingh's *Illustrations of Japan* (1820) for the first time by a Westerner. However, it was four decades later when the European writers started to analyse the national character of the Japanese people based on these stories, which were popular among the people, and not on historical truth.

Among the European narratives that dealt with 'Chushingura' in the 1860s, Rutherford Alcock's memoir *The Capital of the Tycoon* (1863) has been the most influential. Therefore, this article will discuss how Westerners started to appraise 'Chushingura' as ethnographic material based on Alcock's writings. Further, Alcock and his contemporary descriptions of 'Chushingura' will be demonstrated in terms of their cultural backgrounds and the rise of Folklore studies in the 19<sup>th</sup> century.

### はじめに

元禄14年から16年(1701-1703)にかけて起こった、赤穂浪人による吉良邸への討ち入り事件は、綱吉の治世下には起きた代表的な事件として、イザーク・ティチング(Isaac Titsingh, 1745-1812)の著書 *Illustrations of Japan* (1822 [1820]) の徳川幕府下には起きた出来事を將軍の代ごとにまとめた“Annals of the Djogouns”で言及されたものの、西洋人から本格的な注目を集めたのは1860年代以降であった。本稿では、約40年ぶりに西洋人が「忠臣蔵」を話題に上らせるようになった背景について、その後の西洋人の「忠臣蔵」に対するイメージに影響の大きい、ラザフォード・オー

ルコック(Rutherford Alcock, 1809-1897)の *The Capital of the Tycoon* (1863) (邦題『大君の都』)を中心として扱い、考察を行う。本稿の目的は、オールコックの「忠臣蔵」の記述が形成される過程をより具体的に解明することを通して、1860年代の西洋人による「忠臣蔵」受容を当時のヨーロッパの文化的背景に位置づけて読み解くことにある。

1809年、ロンドンの郊外に医師の息子として生まれたラザフォード・オールコックは、1843年に熱病の後遺症によって医師としてのキャリアを諦めることとなったのちに外交官へと転身し、翌年から中国へと赴任した。オールコックはそのまま1859年まで、福州、上海、広東といった中国の開港都市の領事を歴任したあと、1859年に初代日本総領事として着任し、公使へと昇格し、1864年まで江戸およ

び横浜に滞在した。オールコックは、日本にいながらイギリスの雑誌に記事を送りそれらを発表していたが、上下2巻本の大著 *The Capital of the Tycoon* はその集大成として、彼の一時帰国中に出版された<sup>1)</sup>。「忠臣蔵」に関わる記述は *The Capital of the Tycoon* の上巻第17章にあり、1860年3月24日に発生した、水戸藩浪人による大老井伊直弼の暗殺事件である桜田門外の変の詳細な説明や、事件に関するオールコックの考察の後に、章をまとめる形で配置されている。

オールコックが「忠臣蔵」の叙述を桜田門外の変の記述に続く形で配置したことについて、既往研究では、オールコックの桜田門外の変の解釈と関係しているとする見方が多いものの、具体的に、どのような経緯でオールコックがここで「忠臣蔵」に言及したのかについては、いくつか異なる見解が示されている。桜田門外の変を復讐として解釈していることと彼の「忠臣蔵」への注目に関係を想定する見方が代表的で、増田毅(1980)は、オールコックの解釈は「忠臣蔵」の物語を知っていたために形成された「先入感」に起因するとし<sup>2)</sup>、鶴飼政志(2001)は逆に、桜田門外の変を復讐と捉えたことが復讐譚である「忠臣蔵」に彼の目を惹き付けたとした<sup>3)</sup>。一方、「忠臣蔵」の話題を、事件の首謀者たちの思想に対して抱いた疑問に関連して言及されたとする論考もある。例えば、佐野真由子(2003)は、浪人たちの決死の行動に対する違和感<sup>4)</sup>、タッカー(2018)は、武力行使が政治的手段として認められていることに対する違和感が「忠臣蔵」の物語としての普及にオールコックの関心を向けさせたと述べる<sup>5)</sup>。これらの論考とはやや異なる立場から「忠臣蔵」に関する記述を捉えた論考としては、太田昭子(1991)の論が注目される。太田は、事件そのものとのつながりには一切言及せず、オールコックが「日本人の倫理観や国民性」を理解する糸口として人々に膾炙する「忠臣蔵」の物語に注目したと述べ、これを彼の「眼識の高さ」がもたらした特徴的な観察であるとした<sup>6)</sup>。

本稿では、既往研究の動向を踏まえ、次の2点を明らかにしたい。1つ目は、オールコックの「忠臣蔵」への関心と桜田門外の変そのものへの評価との前後関係の整理であり、2つ目は、オールコ

ックが日本人の国民性を紐解く端緒として大衆に普及した物語である「忠臣蔵」に注目した、より具体的な事情である。本稿の議論は次のように進行する。第1節では、*The Capital of the Tycoon* の成り立ちを踏まえて上巻第17章の内容が構成されるまでの経時的な変化を確認し、桜田門外の変に対するオールコックの見解の形成が、事件と「忠臣蔵」とを結びつけるよりも以前に行われた可能性を検討する。第2節では、オールコックの来日時の日本観に影響を与えていたと思われる、先行する日本関係の文献における日本人論の確認を通して、浪人による襲撃を復讐行為と解するオールコックの見方と、日本人に関する既存のステレオタイプとの類似性を指摘する。第3節では、オールコックの記述、および同時期に「忠臣蔵」に言及した2つの記述を、彼らの文化的背景である、19世紀のヨーロッパにおけるフォークロアに対する関心の高まりを踏まえて解釈する。

## 1 桜田門外の変に関する記述の経時的变化

本節では、オールコックが序文で説明する本著の成り立ちを踏まえて、本章の構成を確認していきたい。

増田(1980)は、*The Capital of the Tycoon* をオールコックの日本観を読み解く資料として用いる際、本著の内容が段階的に構成されたことに留意しなければならないと提言した<sup>7)</sup>。増田も引用した *The Capital of the Tycoon* の序文では、本著の内容をどのように構成したのか、オールコック自身が語っている。

わたしが出くわした事物やできごとについてのこれらのかんたんな略式の記録を読みなおしてみると、それらの大半は、当時考えられた以上に意味深長であり、かつまた偶然にも日本人の性格とか制度とかを研究するのに役立つということがわかった。それゆえに、このような第一印象や鉛筆でごく自然に走り書きしたものは、できるだけそのままにし、のちに

経験したり、より十分な知識をえたために訂正したり、詳述したりする必要のあるものだけに手を加えるというのが、わたしの目的であった<sup>8)</sup>。 (上、p.35。以下、下線部は稿者による)

Many of these brief and informal records of things or events I found on looking back, were much more pregnant of suggestion than they had appeared at the time, and calculated incidentally to throw a reflected light on Japanese character and institutions. It has been my purpose, therefore, to preserve as far as possible these first impressions, and unstudied touches of the pencil, with such corrections and amplifications only, as later experience and fuller knowledge may have enabled me to supply<sup>9)</sup> .

上に引用した原著の編纂方針を踏まえて第17章を検討することにより、オールコックが「忠臣蔵」を知った、または、彼が桜田門外の変と結びつけて考え始めた時期を把握することができるのではないだろうか。*The Capital of the Tycoon* が出版されるまでに発表された、オールコックの桜田門外の変に関する記述は、①1860年4月2日付で外相ジョン・ラッセルに送られた詳報、②1861年1月に *Edinburgh Review* に掲載された“Japan and the Japanese”という40ページほどの論考の一部の2つである。( *The Capital of the Tycoon* 第17章を③とする。)

ラッセルへ送られた大老襲撃事件の第一報を見ると、当時のオールコックが、井伊直弼が死亡したことや事件の詳しい事情についてはまだ聞かされていなかったものの、事件に関する彼の分析がこの時点から大きく変わってはいないことが分かる。例えば、

この事件全体には、この国や時代、人々の状態の典型となるような何かがあるため、詳細に関する手短な説明は決して面白みのないものにはならないでしょう。

there is something so illustrative of the

state of the country, the times, and the people, in the whole affair, that a short account of the detail will not be without interest.<sup>10)</sup>

という見方は、この翌年に発表された“Japan and the Japanese”にも、さらにその2年後に出版された *The Capital of the Tycoon* における桜田門外の変の記述でも見られる。さらに、襲撃が頻発する社会状況を日本と中世ヨーロッパの類似性として指摘する視点も、①から③すべてに見られた。また、襲撃時間や場所の選択などから浪人たちの戦略性や周到さを看取り、目的のためには自己犠牲をいとわない彼らの覚悟に注目している点も同様である<sup>11)</sup>。この自分の命に対する無頓着は、後で言及する②においてより大きく取り上げられている。そして、①の報告書からは襲撃の首尾について当時の情報が錯綜していた様子がよく分かる。臨場感に溢れた筆致で、大老が駆け付けた隣家の大名の家臣らによって救出される様子が描かれているもの<sup>12)</sup>、これは実際には起き得なかった展開で、③において、オールコックが事件直後に聞いた、役人たちが西洋人たちに対して「いえといわれたこと(中、p.85) (what they were told to say<sup>13)</sup>)」としてまとめられた情報のもともとの内容であったと思われる。一方、襲撃者たちの行方については、当時から詳細な情報を把握していたようである。捕縛されそうになった2人の浪人が「ハラキリ」して果てたこと、深手を負った1名が口封じのために仲間によって殺され、その首を持って逃げようとして捕縛された浪人がいたエピソードは、②③でも言及された。①の執筆時、オールコックが懸念事項にあげていたのは、犯人が水戸浪人であったことから、事件が内戦に発展するかどうか、また、西洋諸国と幕府を対立させる目的で彼らの一党が攻めてきた場合に公使館の護衛が役に立たないだろうという点であった。この記述が注目されるのは、この時点でオールコックは、大老襲撃を浪人たちの政治的意図に基づく攻撃と理解していたことが分かるためである。

事件から半年以上が経過し、事件の顛末が明らかになったあとに発表された②の記事<sup>14)</sup>では、

報告書で述べられた浪人たちの像に変化はないが、襲撃の描写はラッセルへの手紙を上書きする形で修正し、井伊大老が救出されてなどおらず、実際には襲撃の場で殺害されていたことなどを、より事実在即して書いている。そして、この記事では、浪人たちを英雄視する一般大衆の反応と、事件が浪人たちによる水戸公のための自己犠牲の復讐であったという①とは異なる事件の解釈があらわれる。一般市民がまことしやかに語る俗説として、①にも見られた、深手を負った襲撃者の一人が仲間にとどめを刺されたエピソードがこれとは異なる観点から記されている。ここでは、仲間にとどめを刺し、その首をもって逃げようとした浪人は、口封じを目的としていたのではなく、井伊大老の首が水戸に確実に届けられるようにと、その囷になったのだという俗説として紹介される。そして、これに対するオールコックの分析は、次のようであった。

これが俗説に過ぎなくとも、または単純な真実であっても、何が行動様式になり得ると信じられているか、そして、日本では、必死な者たちが目的のためには自分の命を犠牲にする用意がどれほどあるのか証明するのに役立つ。Whether this be merely a popular version or the simple truth, it serves to prove what is believed to be a course of action; and how ready desperate men are to sacrifice their lives in Japan for an object<sup>15)</sup>.

また、浪人たちの行動に関する大衆の反応はこの他にも紹介されていて、犯人たちが拷問に耐え兼ね全てを白状したとする幕府の情報に反して、犯人たちは勇敢にも最後まで口を割らなかったという、浪人たちを英雄視した解釈が「判じもの (ingenious rebus<sup>16)</sup>)」から見られたという。世間からの反応を踏まえて、オールコックは、襲撃が、「彼らには (稿者注: 浪人たちには) 何も得るものなどなかったし、仕返すべき個人的な諍いもなかった (They had nothing to gain, and no personal quarrel to avenge)」にも関わらず行われた、無私の「自己犠牲の行為 (act of self-devotion)」であったという分析を導き出した<sup>17)</sup>。半年間の情報収集

を通して世間の人々の事件に対する反応を知ることになったことと、事件が、浪人たちにとっては主君を冷遇した井伊大老に対する「彼らの主君の恨みに報いる (to avenge the wrongs of their chief)」ための無私の献身であったという解釈の形成は、連動していたのである。

事件から3年が経過した③の記述では、②では削除された①に記された事件内容を、幕府の役人によって吹きこまれた内容として簡略化して記し、事件の内容や分析はほぼ②を踏襲して、細かい修正を加えた上で、それ以降の知見が追記されたものになっている。②と③の違いは、②で見られた、大衆の間での事件の取り扱いへの注目が、③ではさらに比重を増していることである。まず、①で浪人たちの口封じの手段だったと紹介された、仲間にとどめを刺し、首を持って逃走を図った浪人のエピソードも、③においては、

自分じしんないしは自分の主人のうらみのためにはゆうゆうと自分の生命を犠牲に供しうる向こう見ずな男がいるということを証明するのに役だつ。(中、p.90)

how desperate men are, in Japan, ready to sacrifice their lives deliverately in a feud – their own, or their chiefs<sup>18)</sup>.

と、主君に対する無私の献身である点が②よりもさらに強調されている。そして、中世ヨーロッパの不穏さと不安定な日本社会の実態が類似し、先行する日本関係の文献に見られる平和なイメージとは異なっていることにふれたあと、②の記事が幕府の条約不履行への批判に筆を進めるのに対し、③は、「英雄的行為や因果応報などにかんする一般民衆の観念 (the popular idea of heroism and poetic justice)」を例証する物語として「忠臣蔵」に言及するのである。

オールコック自身が述べている *The Capital of the Tycoon* の記述の成り立ちを考慮すると、桜田門外の変が浪人たちによる水戸公の為の復讐であったという解釈は、「忠臣蔵」からの影響ではなく、一般大衆の反応を知ることになったことが要因であったと考えた方が、より自然であると思われる。

オールコックが「忠臣蔵」を知った、もしくは、桜田門外の変との結びつきを考え始めたのは、②の記事以降ということになるためである。

## 2 復讐と日本人

本節では、オールコックが桜田門外の変を復讐だと解釈した要因の1つとして、彼が来日に際してすでに持っていた日本人のイメージを検討する。

ジョン・アーリは、『観光のまなざし』において、新たな土地を訪れる旅行者の観察眼が無色透明なものではなく、「その個人の体験や思い出によって決まり、その枠組みは規範や様式で決まり、また、流布しているあれこれの場所についてのイメージとテキストにもよる」と説明している<sup>19)</sup>。アーリはここで、旅行者がその場に行くよりも前に、所属する社会のコンテクストに影響を受けて、何かを体験したときの感想があらかじめ規定されていることを説いている。この理論は、未知の国であった日本を観察するオールコックにもあてはめることが出来るだろう。大石学(2009)は、16世紀の宣教師の来日以降、日本を訪れた外国人が、先行する日本に関する記述を研究したうえで来日し、それらの書物に描かれたイメージと自分の目に映る日本とを比較しながら自身の日本に関する考えをまとめていたことを論証している<sup>20)</sup>。つまり、多くの訪日外国人の日本に対する観察眼には、先行する文献によって形づくられる部分が大きかったと考えられる。オールコックの場合、本文中において、当時出版されていた日本関係の書物を「さいきんの編集物(上、p.104)(the recent compilations)」と皮肉り、さらに、これらの「編集物」が拠ったオランダ商館員の著作の客観性を否定しているが、これは逆に、オールコックがこうした先行文献を読んでいたということでもある<sup>21)</sup>。

オールコックが来日した時期にイギリスにおいて日本に関する知識を供給していたのは、まさしくこれらの「編集物」であった。横山俊夫(1987)は、ローレンス・オリファント(Laurence Oliphant)が1859年に *Narrative of The Earl of Elgin's*

*Mission* を出版した当時のイギリスにおける日本関連書籍の出版状況について次のようにまとめる。横山によれば、アメリカが積極的に日本に開国の働きかけを行うことに呼応して盛り上がった日本への興味に反して鎖国のために不足している情報が、すでに英語訳が出されていたオランダ商館関係者たちの著作の再版や改訂版の出版によって補われていたという<sup>22)</sup>。過去に出版された日本関係書籍の焼き直しが盛んに行われたこの時期の日本に関する主要な著作としては、*Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century*<sup>23)</sup>(1841)と *Japan: an Account*<sup>24)</sup>(1852) があげられる。オランダ商館関係者らの著作を匿名のイギリス人著者がまとめたおした *Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century* は、トラベル・ライティングや旅行案内書を得意分野としていたロンドンの大手出版社ジョン・マレー(John Murray)から1841年に初版が出された。同年にニューヨークのハーパー&ブラザーズ(Harper&Brothers)からも出版されており、1852年、1855年にそれぞれロンドン、ニューヨークで同じ出版社から再版が相次いでいることから、イギリス、アメリカ両国で多くの読者や影響力を持った書籍だったことがわかる。本著の著者は長らく不明のままであったが、大森実・篠田佐多江が当時の出版広告や目録などを確認し、バスク(Busk)というイギリス人女性を著者と比定し、ケンペルやティチング、ツンベルグ、シーボルトらオランダ商館関係者の11の著作が参照されていることを明らかにした<sup>25)</sup>。*Japan: an Account*の著者であるスコットランド人の文筆家チャールズ・マクファーレン(Charles MacFarlane)も、一度も日本を訪れたことがないまま、バスクの場合と同様に、オランダ商館関係者の著作を中心に本を執筆した。初版はアメリカとイギリスで出版され<sup>26)</sup>、1856年にはイギリスで海賊版まで出された<sup>27)</sup>。

これら2冊には、日本人が執念深い人種であることが、過去の著作から例を引き出し、繰り返して述べられている。例えば、*Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century*には、日本の演劇について論じた部分で、1833年にオランダ語で出版されたヨハン・フレデリック・ファン・

オーフェルメール・フィッセル (Johan Frederik van Overmeer Fischer) の *Bijdrage tot de Kennis van het Japansche Rijk* (邦題は『日本風俗備考』) から「英雄劇にあつては、特に国民性として復讐心が強いことがよく現れているが、しかしそれだけでなく常に気高い勇気と関連付けられていることが多い<sup>28)</sup>」という部分を引用し、日本の演劇作品は、内容を知ってしまうと繊細な西洋人にとっては受け入れがたいものだとして述べている。このフィッセルの記述はマクファーレンも引用しており、その上で、演劇から分かる日本人の嗜好として、「悪魔のような復讐の熱情や刑罰や拷問を見ることを好む点など、好ましからざる国民性 (the unfavourable features of the national character; such as a demoniacal passion of revenge, and a fondness for witnessing punishments and tortures)」があると指摘した。また、「忠臣蔵」についてこれらの本がふれることはなかったものの、両書は、これが記載されたティチングの *Illustrations of Japan* から異なる事件を引き合いに出して日本人が復讐に執念を燃やし、命を賭ける民族だということを述べた。 *Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century* が例として用いたのは、由井正雪や丸橋忠弥などが幕府の転覆を謀った慶安の乱 (1651年) の記述で、ティチングがこれを、丸橋を首謀者とする彼の父のための復讐だったと説明した部分を引用し、その際に2度にわたって、日本人の国民性は「執念深い (vindictive)」ものだと述べた<sup>29)</sup>。 *Japan: an Account* は、ティチングの本では赤穂浪人の討ち入り事件と並べて記述されていた深堀事件 (1701年) を引用し、日本人の「国民性の大きい欠点 (the great defect of the national character)」である「復讐の渴望と熱狂 (the thirst and madness of revenge<sup>30)</sup>」がよく現れた事例として紹介した。

既にある日本人表象を繰り返したに過ぎないこの2著で、復讐者としての日本人がこれほど強調されていることからわかるとおり、日本人と復讐とは、この頃までに西洋人のイメージの中でしっかりと結びつけられていた。1859年に出版された *Narrative of The Earl of Elgin's Mission* において、実際に日本を訪れたオリファントが、日本人は「悪名高いほど執念深い (notoriously vindictive<sup>31)</sup>」と述べ

ていることにも、これがステレオタイプとして定着していたことが表れている。こうした表象の古いものでは、16世紀末に日本を訪れたイタリア人宣教師ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano) が、『日本巡察記』(1582)において、「誰かに復讐し、彼を殺害しようと決意すると、その仇敵に対してそれまでよりも深い愛情と親睦さを示し、共に笑いともに喜び、状況を伺い、相手が最も油断をした時に、剃刀のように鋭利で、非常に重い刀を手にかけて、次のような方法で斬りつける<sup>32)</sup>」と、日本人が感情を隠し通すことに長けていることを説明した一節が知られている。他にも、18世紀には、薩摩藩士がオランダ東インド会社の台湾総督を藩主を侮辱したとして殺害したというケンペル (Engelbert Kaempfer) の記述に基づいて、ツンベルグ (C. P. Thunberg) が日本人の復讐に対する執念と無慈悲さについて述べていた<sup>33)</sup>。

オールコックの来日以前の、イギリスを中心とした西洋の文献では、日本人は復讐のためには人生を賭けるものであり、それが正義の行いとして称賛されていることが繰り返し述べられていた。こうした先行文献を読んでいたオールコックが、桜田門外の変の評価について本節で確認してきたイメージから影響を受けていたとしても何ら不思議ではない。さらに、この種の言説においてティチングの「忠臣蔵」の記述が一度も引かれず、過去に起きた他の復讐の事例が具体例として用いられていた事実からは、1850年代までは西洋人にとって、「忠臣蔵」は数ある仇討事件の一つでしかなく、とりわけて目を引くものではなかった可能性が示されている。

### 3 民俗資料としての物語

では、1860年代になって「忠臣蔵」が一躍西洋人の注目を浴びるようになった背景には、一体何があったのだろうか。本節では、19世紀のヨーロッパにおけるフォークロア研究の機運の高まりを背景に置き、オールコックおよび同時期の西洋人による「忠臣蔵」に関する記述を改めて解釈してみたい。T. ベイクロフトによれば、19世紀を通して隆盛した

フォークロアの収集と研究に共通する目的は、「『国民』やその本物の声の探求 (the search for 'the people' and its authentic voice)」であったという。そして、その根底にあったのは、国民というのは同じ文化的慣習を共有する人々のことであり、共有された文化的慣習は国民性を構成する要素であるという概念であった<sup>34)</sup>。物語は、こうした大衆が日々繰り返す文化的慣習の1つとして数えられる。オールコックが外交官としてのキャリアを歩みだした19世紀中期は、ヨーロッパ各国の国民性を定義するために用いられていたこの手法が、植民地をはじめとするヨーロッパ外の人々を観察するために転用され始めた時期でもあった。植民地主義とフォークロア研究の発展との繋がりについて述べたS. ナイターニ (2016) は、19世紀初めまでヨーロッパ内の潮流であったフォークロアの記録・調査活動が、19世紀中頃から20世紀初めにかけて、外交官や宣教師らを通して急速に国際的なものへと発展したことを説明している。ナイターニは、その具体的な事例として、インドやアフリカで採集された物語が、現地人の国民性の実態を示すものとして英訳され、その結果本国の読者から現地人に対するステレオタイプが強化され、バイアスが形成されていったことを紹介している<sup>35)</sup>。

日本における西洋人の口承文芸の採集活動の本格的な始まりも、植民地主義を通じたフォークロア研究の国際化の時期と重なっていた。F. M. メイヤー (1984) は、オールコックが *The Capital of the Tycoon* において、「花咲き爺」や「舌切り雀」を記録していることを、最初期の物語採集活動と位置づけた。そして、彼が「民話 (folk tale)」という語を用いずに、「伝説 (legends)」や「寓話 (fable)」としてこれらの物語に言及していたことについて、これは、最初期の「採集者たちが自分たちが求めているものがずばり何なのか、あまり自覚的ではなかった (The searchers were not very articulate about what, exactly, they were looking for<sup>36)</sup>.)」ためであると述べた。メイヤーの指摘は、オールコックを含む彼らが、発展途上のフォークロア研究の実践者であり、必ずしも「民話」と限定しないまま、大衆に膾炙した物語を広く集めていたことを意味する。実際、イギリスにおけるフォークロア研究の

歴史の中で、オールコックの来日時はまさにフォークロアという語の定義が固まっていく途上であった。ウィリアム・トムス (William Thoms) によって学問領域を指す語として「民俗学 (folklore)」が *The Athenaeum* 誌で提唱されたのは1846年のこと<sup>37)</sup>、The Folklore Society の紀要 *The Folklore Record* の第1号が発行されたのは、1878年のことであった。

大衆が愛好する演劇に国民性が表れているという見方は1860年代以前からすでに見られ始める。第2節で確認したフィッセルの芝居に関する言説などの他に、前節で確認した *Japan: an Account* の深堀事件に関する記述には、続けて、「この熱狂はまた、…劇作家たちに大いに主要な題材を提供し、また、よく知られた物語の数々にも描かれているようである。(This passion, ..., also furnishes great staple materials for their dramatists and other writers; and it seems to be illustrated in numerous popular stories<sup>38)</sup>.)」と、復讐に執着する国民性が演劇や物語にも表れていると述べている。これに倣うように、オールコック自身も、1861年に大阪で芝居見物を行った際、フィッセルと同様の観察を行っている。

ところで、また幕が上がると、こんどは、結末はどうであれ、とにかく日本人がとくによるこぶ場面になる。勇敢な英雄的な行為、流血と自刃、というものは、わたしに理解できた限りでは、日本人のほとんどすべての物語の主成分ともいべきものである。 (中、p.392。下線部は稿者による)

But the curtain rises again, and upon scenes which there is no doubt are the peculiar delight of Japanese, whatever the last may have been: deeds of valor and heroism, of bloodshed and self-immolation, the staple of nearly all their story-books, so far as I have been able to dip into them<sup>39)</sup>.

上記の引用の下線を施した部分からは、加えて、オールコックが自ら複数の物語に目を通し、パターン化して分析していたことが分かる。その他、メイ

ヤーが指摘した以外にも、オールコックは旅の途中で立ち寄った浜松における夜泣き石の伝承を記録しており、彼は、大衆に膾炙した物語に関心を持ち、積極的に知識を得て分析しようとしていた。

これらを踏まえて、オールコックの「忠臣蔵」への言及の書き出しに目を通すと、歴史的事実ではなく、「忠臣蔵」が人々によく知られた物語であることを強調するその筆致が、まさしくフォークロア研究における民話の取り扱いと呼応しているように思われる。

奇妙な歴史だ—本当だとしたら奇妙だが、つくり話であっても奇妙なことに変わりはない。つくり話であるばあいには、芝居や絵本や通俗的な物語のもとをなす多くの伝説や伝統にもっとよくしめされているように、英雄的行為や因果応報などにかんする一般民衆の観念をひじょうによく例証しているように思われる。 (中、p.97。下線部は稿者による)

A strange history — strange if true, and scarcely less so if invented. Not less but more illustrative, perhaps, in the latter case, of the popular idea of heroism and poetic justice, as these are, moreover, exemplified in a hundred legends and traditions, which form the staple of their theatrical pieces, their picture-books, and their popular tales <sup>40)</sup>.

「忠臣蔵」を歴史的事実として取り扱わないこの書き出しについて、タッカー (2018) は、ティチングの記述を読んでいなかったためではないかと推定する<sup>41)</sup>。しかし、オールコックは *Illustrations of Japan* について、ティチングの「見上げた努力 (laudable diligence)」によって編纂されたと言及しているため<sup>42)</sup>、ここでは、ティチングの記述を認識した上で、上記の言い回しが意図的に選択されたと見る方が妥当である。討ち入りの顛末について述べたあと、オールコックは、この物語が単なる過去の遺物ではないことを次のように強調して述べている。

かれらは全員江戸のある墓地〔泉岳寺〕に埋葬されたとのことで、今日にいたるまで真の英

雄的行為の模範として、日本のあらゆる勇敢かつ忠義な人間の胸のなかに生きている。わたしは、この物語を聞いた時に、このような通俗的な文学や歴史が一国民の性格や思想と行動の習性におよぼす影響はどのようなものかということを考えざるをえなかった。(中、p.98。下線部は稿者による)

They were all buried in one cemetery in Yeddo, which was pointed out to me, and they live to this day in the hearts of all brave and loyal men in Japan as types of true heroism! As this story was recited to me, I could not help reflecting on what must be the influence of such a popular literature and history upon the character, as well as the habits of thought and action of a nation<sup>43)</sup>.

オールコックにとって、一般大衆の善悪観を知る手がかりになるのは、過去に何が起きたかという歴史的事実ではなく、人々が今愛好する物語としての「忠臣蔵」だったのだ。

オールコックと同時期の「忠臣蔵」への言及には、同様の視点が見られる。ここでは、ジョージ・スミス (George Smith, 1815-1871) の *Ten Weeks in Japan* (1861)、ルドルフ・リンダウ (Rudolf Lindau, 1829-1910) の *Un Voyage autour du Japon* (1863) における記述について述べたい。スミスは、1849年から1865年まで英国国教会の司教および中国における宣教師として赴任しており、布教のため、1860年に日本を訪れた。彼は、滞在中の長崎で街歩きの途中、江戸から訪れた役者の一座のために広場に仮設の舞台が立ち、大変多くの人でにぎわっているところに出くわした。この時スミスは、友人から説明を受けながら「忠臣蔵」の舞台をしばらく観劇し、彼が理解した内容を本文中に詳しく述べ、観劇後にティチングの記述で理解を補ったと記している<sup>44)</sup>。スミスの感想からは、彼が日本人にとって復讐と切腹が重要な文化の一部であることを、この観劇した「忠臣蔵」を通して実感し、ティチングの記述は彼の理解を深めるための補助的な資料でしかなかったことがわかる。観劇をする際、スミスはこの作品が日本人の間でどれほど



人気があるのか説明を受け、観客たちが、四十七士側に肩入れして一喜一憂する姿を観察していた。スミス自身は四十七士が行おうとする討ち入りを「血みどろの計画や執念深い復讐 (sanguinary plots and vindictive retribution)」だと捉えていたが、彼らが人気の高い英雄であることから、「復讐や、命には命で報いるというのが日本人の善悪観の本質に溶け込んでいるのだ (Revenge and a life for a life enters into the very essence of poetical justice among the Japanese)」と、芝居の内容から日本人の善悪観を導き出した。

他方、スイスの外交官として来日したリンダウの記述においてもまた、「忠臣蔵」は「本当であれそうでなかれ (Véridique ou non)」と、歴史的事実であることは重要視されない。リンダウは、高位の者に対する敬意が日本では命よりも重く扱われていることの例として、主君を侮辱した相手に命を賭けて報いる浪人たちが日本人の英雄として賛美されていることにふれた<sup>45)</sup>。スミスやリンダウにとっても、「忠臣蔵」は、過去に発生した歴史的事実であるからではなく、今人々が共感し賛美している物語であることが重要だったのである。

## おわりに

本稿では、1860年代の西洋人による「忠臣蔵」に関する記述の中から、特に後世への影響力の大きいオールコックの記述の再検討を行い、この時期に西洋人から「忠臣蔵」に寄せられた関心をより具体的に捉えることを試みた。オールコック自身が述べた *The Capital of the Tycoon* の成り立ちに基づいた第17章の検討からは、オールコックが桜田門外の変を復讐だと位置づけたことに「忠臣蔵」が直接影響を与えた可能性は低いことが分かった。オールコックは先行する日本関係書籍を読んだうえで日本の観察を行っていたが、それらの本の中で、日本人が復讐に執念を燃やす民族であるという描写はすでに16世紀末から繰り返されてきたことを確認した。ティチングが彼の著書で歴史事件として赤穂浪人の討ち入りに言及したことも、この文脈

の中に位置づけられ、1860年代まで特にこれを引用した書籍がなかった点から、この頃はまだ西洋人にとって「忠臣蔵」は目立った存在ではなかったといえる。「忠臣蔵」がとりわけ西洋人の目を引くようになった1860年代の記述はいずれも、人々に膾炙した物語である点に注目していた。大衆の文化活動に国民性の真髓を見出し、民話をその一要素として重視するフォークロア研究がヨーロッパにおいて19世紀を通して急速な広がりを見せていたことは、この文化的背景として重要視するに値する。加えて、オールコックをはじめとする3人の記述者の本業がいずれも、フォークロア研究の国際的な展開を担った外交官や宣教師であり、また、彼らの記述が過去に繰り返された、復讐に執念を燃やす日本人というステレオタイプを強化したことも象徴的といえる。ただし、1860年代初頭に同時多発的に西洋人の間で、数ある有名な復讐譚の中から「忠臣蔵」が取り立てて注目を集めることとなった直接の契機については決定的言説が確認されてはおらず、後の課題としたい。

### 〔注釈〕

- 1) オールコックの経歴は、佐野真由子 (2003) 『オールコックの江戸』 (中公新書, p.7)、岡本隆司 (2012) 『ラザフォード・オールコック: 東アジアと大英帝国』 (ウエッジ) による。
- 2) 増田毅 (1980) 『幕末期の英国人: R・オールコック覚書 (神戸法学双書14)』有斐閣, p.54.
- 3) 鶴飼政志 (2001) 「忠臣蔵が英訳されるまで」『歴史評論』617号, pp.72-79.
- 4) 佐野真由子 (2003) 『オールコックの江戸』中公新書, p.114.
- 5) Tucker, J. A., (2018), *The Forty-seven Rōnin : the Vendetta in History*, Cambridge: Cambridge UP, pp.209-211.
- 6) 太田昭子 (1991) 「忠臣蔵の世界 -- 英語訳にみられる変容過程」『教養論叢』88号, p.8, p.10
- 7) 増田毅 (1980), pp.130-131.
- 8) 『大君の都』からの引用には、山口光朔 訳 (1962 [1863]) 『大君の都 [全3冊]』 (岩波書店) による日本語訳を用い、巻名とページ数を引用末尾に付す。
- 9) Alcock, R., (1863), *The Capital of Tycoon: a Narrative of Three Years' Residence in Japan* vol.I, New York: Harper and Brothers, p.xv.
- 10) オールコックからラッセルに宛てた1860年4月2日付

- の手紙。(Alcock, Rutherford., [1860], "No. 3", *Correspondence with Her Majesty's envoy extraordinary and minister plenipotentiary in Japan*, London: Harrison and Sons, p.9) なお、この手紙の日本語訳は、稿者による。
- 11) Alcock, Rutherford., (1860), pp.9-10.
  - 12) Alcock, Rutherford., (1860), p.10.
  - 13) Alcock, R., (1863), Vol.I, p.348.
  - 14) Alcock, Rutherford., (1861), "Japan and the Japanese", *Edinburgh Review*, vol. 113, pp.37-73.
  - 15) Alcock, Rutherford., (1861), p.61. なお、この記事の日本語訳は、稿者による。
  - 16) Alcock, Rutherford., (1861), p.62. この判じ物の説明は次のようである。「老中（閣老会議）を表示する中国文字が、一部をはぶいて流布された。それをばらばらにすると、口を意味する。すなわち、それ全体は、拷問にかけられた人びとの答弁とその英雄的行為とがその会議の口を閉ざしてしまったことを意味するようにつくられていた。」(中、p.90)
  - 17) Alcock, Rutherford., (1861), p.62.
  - 18) Alcock, Rutherford., (1863), vol.I, p.352.
  - 19) ジョン・アーリ、ヨナス・ラーセン 著、加太宏邦 訳 (2014) 『観光のまなざし [増補改訂版] (叢書・ユニベルシタス1014)』法政大学出版、p.3.
  - 20) 大石学 (2009) 「外国人が見た近世日本と日本人：日本型文明社会の成立と発展」、竹内誠監修『外国人が見た近世日本:日本人再発見』角川学芸出版、pp.131-135.
  - 21) Alcock (1863) vol.I., p.45.
  - 22) Toshio Yokoyama, (1987), *Japan in the Victorian Mind: A Study of Stereotyped Images of a Nation 1850-1880*, London: Macmillan, p.46.
  - 23) [Busk, Mary], (1841), *Manners and Customs of the Japanese, in the Nineteenth Century: from Recent Dutch Visitors of Japan, and the German of Dr. Ph. Fr. von Siebold.*, London: John Murray.
  - 24) MacFarlane, Charles., (1852), *Japan: an Account, Geographical and Historical, from the Earliest Period at Which the Islands Composing This Empire Were Known to Europeans, Down to the Present Time, and the Expedition Fitted Out in the United States, etc.*, London: G. Routledge.
  - 25) 大森実・篠田佐多江 (1986) 「*Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century* の検討 -1」『英学史研究』19号、pp.33-50.
  - 26) 初版と同年にニューヨークでG.P. Putnum 社から出された版のこと。
  - 27) 1856年にハートフォードのS. Andrus & Son. 社から出された版のこと。
  - 28) ファン・オーフェルメール・フィッセル (1978 [1833]) 『日本風俗備考2』(庄司三男・沼田次郎訳) 平凡社、p.69.
  - 29) [Busk, Mary], (1841), p. 164, p.171.
  - 30) MacFarlane, C., (1852), pp.356-357.
  - 31) Oliphant, L, (1859), *Narrative of The Earl of Elgin's Mission* vol.II, Edinburgh: William Blackwood and sons., p.207.
  - 32) ヴァリリヤーノ (松田毅一 他訳) (1973 [1583]) 『日本巡察記 (東洋文庫 229)』平凡社、p.12.
  - 33) C・P・テュンベリー (高橋文 訳) (1994 [1793]) 『江戸参府随記 (東洋文庫 583)』平凡社、p.228.
  - 34) Timothy Baycroft, (2012), "Introduction", In Baycroft, Timothy and David Hopkin (eds.), *Folklore and Nationalism in Europe During the Long Nineteenth Century*, Leiden: Brill, p.1.
  - 35) Sadhana Naithani, (2016), "Colonialism", In Anne E. Duggan, Donald Haase, and Helen J. Callow (eds.), *Folktales and Fairy Tales: Traditions and Texts from around the World, 2nd Edition, vol.I*, Santa Barbara: Greenwood, pp.225-226.
  - 36) Mayer, F. M. (1984). "Introduction: Antient Tales in Modern Japan" In *An Anthology of Japanese Folk Tales*, Indiana: Indiana UP, p. ix.
  - 37) Dundes, Alan, (1999) "Folk-lore and the Origin of the Word: William Thoms", *International Folkloristics*, Lanham: Rowman & Littlefield. p.9.
  - 38) MacFarlane, C., (1852), p.357.
  - 39) Alcock (1863), vol.II, p.114.
  - 40) Alcock (1863), vol.I, p.357.
  - 41) Tucker, J. A., (2018), p.211.
  - 42) オールコックはこの本をフランス語の題で呼称していることから、彼が読んだのはフランス語版であっただろうと推測される。(Alcock, Rutherford., [1863], vol.I, p.184)
  - 43) Alcock (1863), vol.I, p.358.
  - 44) Smith, George., (1861), *Ten Weeks in Japan*, London: Longman, pp.128-137.
  - 45) Lindau, R. (1863), "Un Voyage Autour du Japon: Souvenirs et Récits. III: La Seconde Capitale du Japon — Le Chateau et la Cité de Yédo. — Les Habitans", *Revue des Deux Mondes SECONDE PÉRIODE*, Vol. 47, No. 1 (Sept, 1863), p.145.